

第5章 押型文土器の編年

— 縄文早期から前期への系譜 —

1 押型文土器の研究と＜早水台式土器＞

縄文早期の土器に、回転棒をもって押捺施文をおこなう＜押型文土器＞がある。この土器を最初に注目し、＜橢円押型文土器＞という名称を付した論文（1932 八幡）を公表したのは、八幡一郎先生である。そうして、現在、中部山地の押型文土器文化研究について、膨大な論考（1974, 1978 八幡）を展開されつつある。

西日本での押型文土器に注目されたのは、小林久雄氏で、熊本県阿高および御領貝塚などの調査（1934, 1939 小林）によるものである。この押型文土器は、しばしば、縄文後期の御領式土器と共伴することがあって、その編年に問題を提起した。

1945年、太平洋戦争終結後は、遺跡の調査と方法に、戦前とは違った点がみられるようになった。広い範囲の発掘と、出土遺物の数値によって、遺跡・遺物を観察し、研究しようとするところみも、その1つである。

大分県速見郡日出町の早水台遺跡は、そうした問題に関しての絶好の対象であった。1953年、多数の研究者が集まり、押型文土器を単純に出土するこの遺跡の調査（1955, 1965 八幡・賀川）となった。遺跡の全体を理解できるほどの広範囲に発掘がおこなわれ、西日本初の住居跡が発見され、また、土器や石器の分類がすすめられた。この調査の中で、旧石器に類似する礫器（Chopper, Chopping-tool, Hand-Axe）が出土し、その疑問（1962 角田）から、遺跡下層の探索がおこなわれた。はたして、ローム層下部、安山岩角礫層上部から、石英質の石器群が検出（1965 芹沢）されるなど、前期旧石器文化について、新たな問題を提起するにいたった。

さて、早水台遺跡発見の押型文土器は、層位の観察・土器形式の違い・文様の変化・石

1932 八幡一郎「橢円押型文」『考古学3—6』東京考古学会

1934 小林久雄「所謂橢円押型文について」『考古学5—6』東京考古学会

1939 小林久雄「九州の縄文土器」『人類学先史学講座11』雄山閣

1955 八幡一郎・賀川光夫「早水台」『大分県文化財調査報告3』大分県教育委員会

1962 角田文衛「日本文化の源流」『古代文化8—3』古代学協会

1965 芹沢長介「大分県早水台における前期旧石器の研究」『日本文化研究所研究紀要』東北大学

1965 八幡一郎・賀川光夫ほか「続早水台」『大分県文化財調査報告12』大分県教育委員会

1974 八幡一郎「日本中部山地における縄文早期文化の研究（上）」平凡社

1978 八幡一郎「日本中部山地における縄文早期文化の研究（中）」平凡社

鏃ほか石器の共伴関係などから、2形式に分類することができた。山形文や楕円文の細かな文様を施し、口縁部裏面に限って刻み目や原体条痕文が施される尖底深鉢形土器の一群と、いま1つは、山形文や楕円文が大きく縦走して施されるほか、裏面には口縁部にむかって斜めに走行する大きな原体条痕文が施され、器壁は比較的厚手で、尖底部は乳房状に整えられている一群の、2つである。前者を早水台Ⅰ式、後者を早水台Ⅱ式と称する。早水台Ⅰ式は、瀬戸内海一帯の押型文土器と、細部まで類似することが明らかであり、早水台Ⅱ式は、和歌山県高山寺貝塚（1939 浦）出土の土器と一致している。

早水台Ⅰ式およびⅡ式土器に共伴する石鏃には、明確な形態的違いがみとめられる。前者は、2等辺3角形の長手の形態をしたものが多く、後者は、鋏形鏃といわれる短形で基部のえぐり込みが大きく深いものが多い。前者には、細石鏃の混入（1970 賀川）があった。石鏃の材質は、黒曜石・珪岩・サヌカイトなどであるが、姫島産の黒曜石が検出されていないことは、留意しなければならない。また、とくに注目されるのは、前述のように、各種の礫器が、Ⅰ、Ⅱ式土器群に混在していたことである。

押型文土器のほかに、無文厚手の尖底深鉢形土器があり、Ⅰ、Ⅱ式の押型文土器に共伴して出土する。この無文土器は、Ⅰ式土器との共伴が数の上で多量であった。無文土器は、押型文土器発生以前の尖底深鉢形土器で、早水台Ⅰ式土器に、その残留が共伴出土することは理解できる。このことは、愛媛県上黒岩洞穴（1967 江坂）や、大分県川原田洞穴（1964 岩尾・酒匂、1967 賀川）などの調査で、明らかとなった。無文土器から押型文土器への移行は、大分県成仏岩陰（1972 坂田）で検討され、無文土器そのものの層位的研究は、大分県二日市洞穴（1980 橘）において整理された。

2 田村式土器の確認

早水台Ⅱ式の土器は、厚手の尖底深鉢形土器である。文様は、主として楕円の連続文であり、その楕円形は大粒である。口縁部裏面には、施文原体である棒状工具を擦過して、原体条痕文が施されている。このような土器形式は、前述のように、浦宏氏によって、和歌山県高山寺貝塚の調査において指摘されているところである。

1939 浦 宏「紀伊国高山寺貝塚発掘調査報告」『考古学 10-7』東京考古学会

1964 岩尾松実・酒匂義明「速見郡山香町大字広瀬川田原洞穴の調査」『大分県地方史 34』大分県地方史研究会

1967 江坂輝弥「上黒岩洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会

1967 賀川光夫「川原田洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会

1970 賀川光夫「縄文文化の起源と押捺文土器の発達」『史学論叢 5』別府大学史学研究会

1972 坂田邦洋「成仏岩陰遺跡の調査」『国東文化財調査報告書』国東町教育委員会

1980 橘 昌信「大分県二日市洞穴遺跡発掘調査報告書」別府大学付属博物館

大分県大野郡朝地町所在の田村遺跡は、1958年に調査（1960 賀川ほか）された押型文土器の包含層である。ここでは、土層の状態に注目すべき点があり、褐色土層の下に、赤色荒粒子土壌（アカホヤのことを、当時このように呼んでいた。）が厚く堆積（1971 賀川）し、その下部に、黒色土層の堆積をみた。この黒色土層は、早期の土器を単純に出土する層（今日では、押型文土器のほか、塞ノ神式など円筒系土器の出土がある。）であった。土器は、早水台Ⅱ式が主体で、楕円形の大粒な文様を中心とし、縦走して施文されていた。厚手に焼成された土器の文様は、楕円がおもで、ついで山形文がみられた。文様は、早水台Ⅰ式に比較すると、大形に終始していた。器壁は厚手で、口縁部は外反し、乳房状尖底が特徴とされる。口縁部裏面には、施文原体を擦過移行して、原体条痕文を施している。この土器に、無文土器が共伴するが、その数は少ない。

石器のうち注目されたのは、柳葉状の尖頭形石器で、両面が加工されており縁辺部の調整もよく、長さ6cmほどの石器である。石鏃は珪岩・サヌカイトの類が多く、黒曜石はみられなかった。石鏃の形態は、鉤形が大部分であって、長手の2等辺3角形をしたものはごく少数であり、やや偏平性をおび、大形になっている。このように、土器のほか、石器からみても、早水台Ⅰ式とは違い、Ⅱ式に相当するところが多い。その上、田村遺跡全体の土器形式が単純性をもっていることもあって、田村式土器という名称をもちいることにした。この段階で、押型文土器の編年の上で、早水台式（同Ⅰ式のみ）、田村式（早水台Ⅱ式）というそれぞれの地名を付した名称で位置づけることにしたのは、周知のとおりである。

3 ヤトコロ式土器

阿蘇山は、広大な外輪山をもっているが、とくにその東側には、火山灰が幾重にも堆積してできた平坦な高原がひろがっている。大野川上流の各支流は、この高原を侵食して、東に舌状にのびるいくつかの台地をつくった。ここに、有望な遺跡が残されているのである。その1つに、竹田市大字ヤトコロ所在の遺跡がある。

ヤトコロ遺跡においては、住居跡の一部が検出された。この遺跡上層のアカホヤ（赤色荒粒子土壌）が、残された柱の穴につまっていたことから、アカホヤの下層である黒色土の最上層に生活面があったことが判明した。これは、アカホヤの堆積直前の縄文早期末葉における文化層をしめしており、塞ノ神式土器のほかに、円筒土器の層位との関係に注意する必要がおこった。したがって、アカホヤ下層に堆積している黒色土層は、縄文早期の単純層ではあるが、円筒土器を含めて、層序的検討を必要とするという問題が残されている。ここに、放射性炭素（C¹⁴）測定数値をあげて、それを層位と合わせて考えたい。いわゆるヤ

1960 賀川光夫・羽田野一郎「大分県大野郡朝地町田村遺跡調査報告書」朝地町教育委員会

1971 賀川光夫「縄文文化の諸問題—黄色火山灰の堆積—」『大分県の考古学』吉川弘文館

押型文土器の編年

縄文前期

＜ 轟 式 ＞	5680±130 ^y B.P	荘貝塚
	5950±210 ^y B.P	上畑田貝塚

アカホヤの堆積 Tephrochronological Key Bed

6050^yB.P ~ 6400^yB.P

円筒系土器

＜塞ノ神式＞	6360±90 ^y B.P	
	6690±50 ^y B.P	粉 IV _b 層
＜吉田式＞	6360±120 ^y B.P	跡江上層

縄文早期

＜ヤトコロ式＞	7320±130 ^y B.P	跡江貝塚下層
＜田村式＞	7730±50 ^y B.P	粉 Va層
	7820±115 ^y B.P	川原田IV層
＜早水台式＞	8200±150 ^y B.P	成仏V層
	8400±350 ^y B.P	黄島貝塚
	8800±200 ^y B.P	川原田VIII層

トコロ式土器では、外反する口縁をもち、押型文が粗大化（山形・楕円）し、縦走施文が顕著となる。器壁はやや厚手化し、底部は平底となり、押型文土器の終末、円筒土器への移行の時期が考えられる。

田村式について、ヤトコロ式土器の問題を検討するためには、1976年に調査を実施した大分県直入郡荻町政所馬渡遺跡（本報告書）の土器が注目される。1960年、道路工事中に採集された貝殻腹縁文の尖底深鉢形土器（1960 賀川）が問題となり、政所式という名称を付した。その後、その出土地点と思われる場所が、土地改良事業に含まれることになったため、調査がおこなわれた。層位はヤトコロ遺跡と同じであるが、土器の種類は、押型文土器のみではなく、撚糸文・縄文の共伴がきわめて多くみられた。

押型文土器は、大形の粒からなる楕円文、縦走る山形文が主体で、これに近い数の格子目文が混在していた。口縁部がやや外反する傾向は、田村・ヤトコロ遺跡と同じであるが、やや円筒状の深鉢形となり、底部が、尖底のものと、小さいながら平底をなすものと

1960 賀川光夫「早期縄文土器の新資料」『考古学雑誌46—3』日本考古学会

が半ばしていた。政所馬渡遺跡の特徴は、前述のように、撚糸文土器が多数をしめることで、前期前葉にみられる縄文の盛行に先立つものと考えられる。

さて、いわゆる〈政所式土器〉として一般に知られている貝殻腹縁文の尖底深鉢形土器は、政所馬渡遺跡出土土器の大部分が、いわゆるヤトコロ式の押型文土器である中では、いわば特異な存在である。しかし、〈政所式土器〉という名称を、同遺跡の撚糸文・縄文を施す土器をふくめて残しておくことは、将来の研究上必要であろう。なお、ヤトコロ式土器が、押型文のみの分類であったのに対して、政所馬渡遺跡においては、ほかの遺物が共伴するため、ヤトコロ式を検討するよい資料といえる。

4 九州における縄文早期の編年

九州の押型文土器を、かつて、大別して3つの形式（川原田洞穴出土の押型文ベルト施文を1形式とすると4つの形式）に編年（1957 賀川）した。その後の調査研究で、多数の資料が報告され、細部にわたって検討されているが、それらの研究を含めた結果からみて、この編年に大きな訂正を加える必要はないと考えている。しかし、押型文土器の盛行期の前後、すなわち、無文土器から押型文土器への移行の段階と、押型文土器から円筒土器への推移（尖底から平底への過程）については、いくつかの大きく新しい問題が、提起されつつある。

長崎県福井洞穴（1967 芹沢）や、上黒岩洞穴出土の隆線文土器に、1万2千年前という古さの測定値が出されたときは、放射性炭素（ C^{14} ）の信憑性が疑われたほどであった。放射性炭素（ C^{14} ）の測定は、その後、年代判定に秩序ある数値をあらわし、現在では、科学的方法としてはもっとも信頼され、一般にもちいられている。

さて、西日本において、尖底無文土器が、押型文土器の先駆的なものとして出土しだしたのは、1960年前後であった。そうして、押型文土器との層位的関係を明確にしたのは、1962年の上黒岩洞穴や、1963年の川原田洞穴の調査であった。この調査では、押型文土器を包含する文化層の下部から、層を異にして無文土器が発見され、それらを、放射性炭素（ C^{14} ）で測定すると、押型文土器との間に、明確な時間的推移がみられた。

無文土器文化の発達と、押型文土器への移行についての研究は、前述の成仏岩陰の調査において、細部にわたる検討が加えられ、また、放射性炭素（ C^{14} ）による層位年代の測定がおこなわれた。それによると、この遺跡の無文土器は、 V_2 層で 10240 ± 200 B.Pで、上黒岩洞穴IV層の 10085 ± 320 B.Pとほぼ一致した年代が得られている。この無文土器を、さらに詳細に分類したのは、二日市洞穴の層位的観察であった。無文土器は、平底から丸底へと、年代の下降にしたがって変化することが明らかとなり、条痕文を施す平底や無文

1957 賀川光夫「押型文土器共伴資料」『九州考古学2』九州考古学会

1967 芹沢長介「福井洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会

の丸底から、無文尖底へと推移し、押型文文化へと移行することがみとめられた。この二日市洞穴文化層の年代測定は、熱ルミネッセンス法を応用しておこなわれているので、いずれ詳細が得られるはずである。

無文土器の研究の進展は、土器の起原についての編年的問題を整理する方法に、課題を提起したことになる。縄文土器文化の頂上は、福井洞穴の隆線文土器あるいは長崎県泉福寺洞穴（1980 麻生ほか）の豆粒文土器の発見などによって、きわめられつつある。芹沢長介教授によれば、福井洞穴の土層の絶対年代は、第Ⅲ層（隆線文）が 12700 ± 950^y B.P.、第Ⅱ層（爪形文）が 12400 ± 350^y B.P. であるという。これらの文化層から、二日市洞穴の第9および第8文化層の条痕文平底、第7文化層の無文丸底（成仏V₂層、 10240 ± 200^y B.P.に相当）、第6文化層の無文尖底（川原田XⅡ層に相当）、第5および第4（下）文化層の無文尖底への、いわゆる無文土器文化への推移は、隆線文土器から押型文土器までの時間帯を、十分にうめつくしたものと考えることができる。また、二日市洞穴の第4（上）文化層の無文尖底土器は、早水台式押型文文化の前段的要素をもっていることを証明することができた。

ここにおいて、豆粒文あるいは隆線文土器からはじまる九州の縄文土器は、その押型文土器にいたるまでの編年が確立したことになる。これらをまとめると、次のようになる。

九州における縄文早期土器の編年

早水台式 川原田洞穴Ⅷ層	押型文尖底 押型文尖底	8800 ± 200^y B.P
二日市第4（上）文化層	無文尖底	
二日市第4（下）文化層	無文尖底	
二日市第5文化層	無文尖底	
二日市第6文化層 川原田XⅡ層	無文尖底	
二日市第7文化層 成仏V ₂ 層	無文丸底 無文平底～丸底	10240 ± 200^y B.P
二日市第8文化層 二日市第9文化層	条痕文平底～丸底 条痕文平底～丸底	
門田遺跡	爪形文	
福井第Ⅱ層	爪形文	12400 ± 350^y B.P
福井第Ⅲ層	隆線文	12700 ± 950^y B.P
泉福寺	豆粒文	?

1980 麻生 優ほか「特集 泉福寺洞穴」『考古学ジャーナル 172』ニューサイエンス社

5 円筒土器と政所馬渡遺跡出土の土器

押型文から以後の土器文化の移り変わりはどうであろうか。九州における円筒土器文化の系列を、具体的に考える問題を提起したのは、「九州の円筒土器文化」（1977 賀川ほか）である。同論文集での、南九州の前平式土器以降の円筒土器の原流は、押型文土器の平底化にあるという、高木正文氏の考えは、慧眼であった。この問題を解く重要な遺跡が、政所馬渡遺跡である。

政所馬渡遺跡出土土器の大部分は、ヤトコロ式と命名されている早期土器の一群であったが、器形は、尖底深鉢から円筒形への移行をしめす形態にまとめられていた。これまでも押型文土器の尖底深鉢の器形については、製作技術に若干の考察が加えられていた。粘土の巻きあげ法（巻きじまいがとがる）、尖底の背籠（中国地方山地帯）を材料とした型塗りなどである。このような考えは、実証的には、かならずしも多数の同意が得られたわけではない。しかし、押型文土器の平底化は、確実に、＜粘土たが＞の輪積み法によるものであることがわかる。尖底土器から円筒土器への土器製作技術の発展は、巻きあげ法から輪積み法への形成法の移行のうえで、理解できる。

政所馬渡遺跡では、その土器群が、巻きあげ法から輪積み法に移行し、しだいに安定のよい平底へと進展する過程が観察できる。これは、土器片断面にみられる形成痕跡から、十分に理解できる。輪積み法の採用は、土器を円筒形にするばかりでなく、これまでの押型文とともに、燃糸文・縄文が施され、しだいにその数を増す傾向にある。

九州において、縄文による文様で構成され、それが顕著にみられた円筒土器に、宮崎県都城市五十市遺跡出土のもの（1977 野間）がある。その後、高木正文氏は、熊本県塚原遺跡における絡条体圧痕文や、同諏訪原遺跡での燃糸文など、いわゆる縄文による施文が、貝殻条痕文と併用されて、ひろく縄文前期の円筒土器に使用されていることを報告（1977 高木）している。このような円筒土器は、全九州的ひろがりを見せ、わが国における縄文時代文化にとって、重要な存在となりつつある。政所馬渡遺跡において、押型文土器終末の尖底から平底への過程に、縄文や条痕文を主体とする円筒土器へのめばえがみられるのは、注目すべきことである。さらに、豆粒文・隆線文土器から押型文土器までの系譜が具体的になったと同じように、押型文土器から円筒土器への過程についても、編年がすすめられるにいたったのである。さらに、この時代の絶対年代判定に、各所において、物理学的測定がおこなわれており、考古学的層位研究とともに、その成果が期待されるものである。

1977 賀川光夫ほか「九州の円筒土器文化」『考古学論叢 4』別府大学考古学研究室

1977 高木正文「熊本県の円筒土器」『考古学論叢 4』別府大学考古学研究室

1977 野間重孝「宮崎県の円筒土器」『考古学論叢 4』別府大学考古学研究室